



TITLE:

金問題批判

AUTHOR(S):

松岡, 孝兒

---

CITATION:

松岡, 孝兒. 金問題批判. 經濟論叢 1931, 33(2): 304-312

ISSUE DATE:

1931-08-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130060>

RIGHT:

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第三十三卷 第二號

昭和六年八月一日發行

（禁 轉 載）

## 論 叢

經濟的變動の分析……………文學博士 高田 保馬  
デイルタイ哲學と經濟哲學……………經濟學博士 石川 興二

## 時 論

特別會計の整理……………法學博士 神戸 正雄  
所得稅の稅率の改正……………經濟學博士 沙 見 三郎

## 研 究

農家における米の販賣……………經濟學士 谷口 吉彦  
統計利用の意義と問題……………經濟學士 蜷 川 虎三  
東海道濱松宿に關する一考察……………經濟學士 大山 敷太郎

## 說 苑

明治初年御用金の負擔者について……………經濟學博士 本庄 榮治郎  
產米の管外移出高の季節的變動……………經濟學士 八木 芳之助  
金問題批判……………經濟學士 松岡 孝兒  
アンドレアデス氏「日本の人口」について……………經濟學士 宮本 又次

## 附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

## 金問題批判

松岡孝兒

### 一、序 言

私は、さきに本誌に於て、フランスの金本位制度を論じたる際、これによつて將來に貽された禍根は、フランス銀行の所有せる多額の金爲替にあることを述べ

たが、更に其後に於ても、金爲替準備について私見を述べた際、金本位制度に於て、發行準備となる金爲替が、經濟力の強大なる國によつて運用され市場を移動することの世界金融市場の安定性へ及ぼす打撃大なるものある所以を力説した<sup>1)</sup>。そして最近また、別の機會に於て、事實上フランスの英米金融市場に所有せる此の金爲替が、國際短期流動資金として同國に流入してより、國際金融市場の重大問題となり、所謂金の偏在、Maldistribution 問題と金の不胎化、Sterilisation 問題とを惹起し、遂に此等の問題は、漸く注目され來つた世界不況、Dépression 問題の重大要素として、國際聯盟の注目するところとなり、一九二九年來、金委員會なる特別調査機關を設置して、特に此の種問題をば研究するに至つた所以を述べた<sup>2)</sup>。

勿論之に對しては、フランス側に於ける辯駁があることは當然であるが、我々は此の間に於て、此くの如き主張の據點たる理論の根底には、深く實踐的要求なるものが横たはつてゐることを理解しなければならな

1) 拙稿；フランスに於ける新貨幣制度に就いて（經濟論叢、第二十八卷第四號、P. 533）

2) 拙稿；金爲替準備に就いて（經濟論叢 第三十二卷第三號、P. 901）

3) 拙稿；英佛をめぐりし金論争（經營と經濟、第一卷第六號 PP. 13-24）

い。此の點に關しては、フランスを批難せんとするものゝ側に於ける事情に就いても同然である。従つて、何が列國をして、又は國際聯盟をして、かくの如き主張をなさしめるに至つたかといふことの背後には、夫々其の主張を理由づける理論——即ち實踐的要求の昇化せる理論——が存在してゐることを洞察しなければならぬ。私はかくの如き意味に於て、世界に於ける金問題を吟味せんとするものである。

此の點に於て、國際聯盟のなせる研究は、實に有力なる一の存在である。其の金委員會は、已に昨一九三〇年九月以來、次の如き諸報告を發表し、今や其の最終報告の發表も間近いと謂はれてゐる。

- 1) Interim Report of the Gold Delegation. Sept. 1930.
- 2) Selected Documents submitted to the Gold Delegation, Sept. 1930.
- 3) Legislation on Gold, Sept. 1930.
- 4) Second Interim Report of the Gold Delegation, Jan. 1931.

#### 金問題批判

- 5) Selected Documents of the Distribution of Gold submitted to the Gold Delegation. Febr. 1931.

私は此等の國際聯盟側に關する研究に就いて、多大の關心を有つものである。蓋し、今日我々が經驗しつつある世界不況なるものは、其の期間に於て、其の範圍に於て、將たまた其の深刻さに於て、人類が嘗て經驗せるものゝ中、最も苛辣なるものゝ一つである。それは産業革命以後連續的に交代せる好況に伴へる不況の一種ではあるが、然し今日親しく經驗せるものゝ中には、從來多くの場合に經驗せるものに比し特に加重的要素の存在が考慮される。そして此等の加重的要素の一として、金問題は通貨問題と共に、世界不況に關し、最も重要な地位を占めると考へられるからである。然し私は、今此等の點を細述詳論せんとするものではない。此等の點に就いては、別に他の機會を待つて之に譲ることとし、今は唯、國際聯盟の發表せる諸報告に對し、有力なる批判をば、事實上及び理論上指摘せるものとして、ノガロ (Nogaro) による主張の要旨を紹

介せんとするものである。<sup>1)</sup>

ノガロの金委員會の金問題に對する批判は、全般的に見て、二つの方面からなされる。第一は事實上の方面からであり、第二は理論上の方面からである。故に説明の便宜上、第一に事實上の批判をば、次に理論上の批判をば、逐次説述せんとするものである。

事實上の批判<sup>5)</sup>

事實上より見て、ノガロの觀點は、左の二點に於て金委員會の觀點と異なる。

其の第一は、彼は金の不足が一般物價水準に對して因果的關係を有たないと主張する點である。彼はかくの如き主張に關する事實として、卸賣物價が、一九二五年後漸落し、更に一九二九年後急落せるにも拘らず、此の間金生産額に至つては、多少の變動を示しつつも、大體増加しつつある事實をあげてゐる。<sup>6)</sup>

其の第二は、金の年々の生産額は、——其の一部は貨幣金以外に用ひられるものであるが——金の現在總

額に對して極めて小額であり、(一八五〇年乃至一九二〇年間は約三パーセント) 従つてこの僅少なる金の年生産額に於ける變動は、金總額に對し、極めて低度なる影響を及ぼすに過ぎざるものであるとし、金委員會が年々の金產出高に於ける變動(カッセルの如き)又は年々の貨幣金在高の變動(ストラコツシ又はキチンの如き)が、一般物價水準變動の積極的原因であるといふ主張に對して反對してゐる點である。かくの如き見方は、換言すれば、生産金又は貨幣金の金在高を以て總流通貨幣量と見做すと共に、かくの如き金在高の變動を以て、一般物價の支配的原因であるとし、其の金在高の増加は、生産又は取引の増加に對應するものであるとする考に對する否定である。<sup>97)</sup>

ノガロは更に事實的吟味に於て、前述せる三、バ、セ、  
ント、説なるものが、其の主張者たるカツセルに従へば、  
金の側及び取引の側に就いて、共に成立すると謂はれ  
てゐるに對し、深き疑惑を投じてゐる。ノガロは謂ふ。  
「カツセルの説は、一八五〇年乃至一九一〇年をば期

- 4) Nogaro: La question de l'or devant la Société des Nations. (Revue d'économie politique. 45<sup>e</sup> Année, No. 1)
- 5) Nogaro; op. cit. pp. 4-14.
- 6) Nogaro; op. cit. pp. 4-5
- 7) Nogaro; op. cit. p. 5.

間として採用してゐるが、それは彼の考によれば、此等兩時期に於て、物價が同じ高さにあるからであり、其間に於ける金分量の増加は、取引の増加に照應せるものであるといふ推定に本づいてゐるからである。然し、二つの時期の間に於て、始めにあつた物價水準が、其後再び現はれたからと謂つて、かくの如き單なる事實から、該期間に於ける金分量の増加によつて、取引の増加が、正確に測定されるとは認め難い。現に一八二九年及び一八七七年なる二時期に於ては、物價水準は前後相等しい。然し、此の間に於ける金の増加率は、僅に二二パーセントに過ぎない。

かくの如き觀察の示すところは、貨幣量の増加から取引量の増加を測定し、又はある期間に對し他の期間に求められた金在高増加率を適用するといふが如きことが、如何に專斷であり、危險であるかを知らしめるものである<sup>8)</sup>と。

かくてノガロは、かくの如き事實上に於ける批判を綜合して、金委員會によつて作成された統計は、其の

#### 金問題批判

内容に於て極めて興味あるものを見出すのであるが、然し、之を以て、現在の經濟不況の原因が、貨幣量の不足にあると云ふ主張の根據とはなし得ない。殊に、其の求めた數字、及び曲線より因果的主張を試みんとすることは、尙ほ其の根據薄弱であることを附言する必要があると述べてゐるが、要するに其の論點は、適當に貨幣量の變動を調節して以て物價に安定作用を及ぼすといふ思想の事實上認め難きものであること、及び同時にそれは必然的に、金委員會が前提とする理論的根據への批判への動向を示唆するものであるといふことに歸着する。

### 三、理論上の批判<sup>9)</sup>

以上述べたる事實上の批判は、其の必然的關係に於て、事實の背後にあつて之を支配する理論的根據への追及を要求するものであることは、已に序言に於て述べた通りである。

此の點に於てノガロは、金委員會のとれる主張の出

8) Nogaro, op. cit. pp. 10-11. 圈點は筆者の附せるもの以下すべて同斷  
9) Nogaro: op. cit. pp. 14-31.

發點には、先驗的概念があるとし、即ち此の先驗的概念を前提とするが故に、金委員會は、一般物價水準の下落は、流通貨幣量の不足に因由すべきものであること、及び適當に流通貨幣量を調節する時は、一般物價水準は安定させ得るものであることを主張してゐるものであつて、それは正に金委員會が、所謂貨幣數量説を認めてゐるものであることを推定し得るものであるといふ。

勿論かくの如き考は、屢々カッセル及びストラコツシ<sup>11)</sup>等の主張の中に説明されてゐるものである。尤も此等の論者によれば、已に述べたるが如く、流通貨幣量の概念は、金在高の概念によつて置き換へられ、從つて問題の重點は、金の需要供給なる點に歸着するものであるとされる。<sup>12)</sup>

例へばカッセルによれば、彼は次の如く謂ふ。<sup>13)</sup>即ち、「商品價格の下落は、常に其の反面に於いては、貨幣價値の増加を意味し、從つて此の種の一般的下落に對しては、支拂手段數量の減少以外の他の説明を與へ得ない。斯くの如き減少は、今日では、勿論、相對的なも

のである。蓋し、それは絶えず變動する欲望の支拂手段に對する關係に於て考察しなければならぬからである。とにかく、支拂手段を必要とする國に於ては、物價の一般的下落が起らないやうに支拂手段を供給し得ることが必要である。從つて若しかくの如き一般的物價下落が起る場合があるとせば、それは上述の作用を無視せる結果なること、即ちあらゆる場合に於て、斯くの如き作用が不完全に行はれたことを認めなければならぬ。これ即ち、物價の一般的下落の原因としての現在の不況に關し、あらゆる説明が全然無力なる所以である。物價の一般的下落は、常に、純粹に貨幣的現象である」と。

ストラコツシも亦、略ぼ之に類似せる見方を述べてゐるが、要するに、斯くの如き根本的見解を有する人々こそは、一般物價水準に於ける變動を示す經濟的動搖の原因をば、必然的に、貨幣系列に歸せしめんとする見解を懷く人々を代表するものであるといふことができる。

10) Cf. Cassel; Information du 19. Août, 1930.

11) Cf. Strakosch; Economic consequences of changes in the value of gold (Selected Documents)

12) 此の點については別の機會に再論する。

13) Cassel; op. cit.

斯くの如く、金委員會の主張するところによれば、一般的物價水準の變化は、必然に、貨幣的原因を原因として有つといふことになる。ノガロは、かくの如き貨幣的要素を重要視する數量説に對し「周密なる吟味を加へる必要がある」と述べてゐる。

ノガロの吟味を總括すれば、<sup>14)</sup>彼は、物價變動の全體——一方には騰貴があり他方には下落があるが、主として騰貴又は下落がある意味での——なるものが、極めて一般的には、平均的騰貴又は下落を示すものであるといふことには、別に異論はないやうであるが、其の理由は、蓋し、それは極めて稀なる場合——種々の價格變動が全然中和してしまふといふが如き場合——を除けば、一般物價水準の變動は、必然的に、平均的騰落によつて示されるからである。併しながら彼は、各商品の價格の變動原因に就ては、之を以て、常に同時に、他の商品と共通なる原因を有つと共に、また其の市場に固有な他の原因をも有ち得るものであると主張し、此等の事情よりして、彼によれば、價格の平均

的變動は、恐らくは、各市場に於ける一般的原因並に各商品市場に於ける固有的原因の總體から、又は後の各商品市場に固有な原因のみから、生じ來るものであり、從つて平均的に示される總體の結果を生ぜしめる各種變動原因が、當然に問題となつて來るわけである。

此の點ノガロは、カッセルが物價の一般的水準の變動をば、明瞭にして且つ必然的な説明を有つ現象として考へてゐることを以て不當なりとし、此の物價の一般的水準の變動を知るためには、各種の調査、統計又は指數によるの外手段なく、從つて、此等の調査又は統計よりして、計算其の方法により、一の平均を求め、此の平均を以て指數を作るとする。此の意味に於て、ノガロの考ふるところによれば、一の獨立せる物價の一般的變動なるものは示し得ない。

ノガロは更に、斯くの如き物價の一般的變動の存在を考ふことは、即ちこれを以て全然物價の平均的變動の存在と混同してゐるものであるとし、其の理由を説いて、斯くの如き物價の平均的變動なるものは、指

14) Nogaro; op. cit. pp. 18-19.



數によつて示されるものであり、其の平均的變動は、全然、各商品市場に固有な原因より生ずるものであつて、貨幣的要素の如き一般的原因による假定によらずして尙ほ且つ十分に考へ得られるものだからと云つてゐる。<sup>15)</sup>

かくて、ノガロの主張は、平均的變動を目的とする價格變動の特定原因は、之を除外することができないといふ點の高調から、先づ始まる。事實、現在では、絶對的又は相對的生産過剰は、大多數の生産物に就いて直接吟味せられ、——かくの如きものゝ價格の下落は、平均的又は一般的下落に關係するから——其の下落は、平均的又は一般的下落を説明する。従つて此の場合、貨幣的方面よりする説明の如きは、單に之を吟味する一の補足的な見方に過ぎないものとなる。<sup>16)</sup>

以上、之を要するに金委員會は、専ら斯くの如き所謂補足的見方によつて、一般物價水準の變動を考察すべしと主張するものであり、事實また、斯くの如き觀念こそは、已に不知不識の間に、金委員會をば支配し

また支配しつゝある觀念であつて、これ即ち所謂數量説である。

之に反しノガロは、上述せる見解よりして、數量説を以て不正確の、非實際的なりとすると共に、更に立ち入つて、其の構成要素間の關係を以て相對的なりとする見解は勿論、更に因果的なりとするものに於ても、貨幣側に重點を置かんとするものに對しては、すべて之を以て不當なりとし、反對に一般物價水準側に重點を置き、一般物價水準をば各商品市場に就いて求めた平均と見る限りに於て、妥當なりとなすものである。

## 結 言

以上ノガロが述べた批判的吟味を綜合すると、次の如くなる。<sup>17)</sup>

一、現在に於ける物價下落と偶然的金在高不足との間に因果關係を認めるといふ假定は、何等論證されてゐない。

二、平均的物價變動のみを示すに過ぎない指數によ

15) Nogaro; op. cit. p. 19.

16) Nogaro; op. cit. pp. 19-20.

17) Nogaro; op. cit. p. 32.

つて示される物價の一般的變動は、貨幣的前提によらない場合に於ても考へられるし、又存在し得る。

三、現在に於ける貨幣制度は、金本位によつてゐるが、それは金が取引の國際的決済に關し、廣く自動的作用に應じ得るが故である。流通貨幣量の増加が、一般物價變動の上に、一定の比例的因果作用を及ぼすといふことは、先驗的にも、また事實的にも、之を確認し得ない。

四、従つて、流通貨幣量をば、或は膨脹せしめ、或は收縮せしめることにより、一般物價水準を安定せしめるといふことには、何等の嚴密なる理由がない。

要するに、金委員會の結論なるものは、ノガロの見解による限りに於て、流通貨幣は之を適宜規整することにより、一般物價水準を安定せしめ得るものであるとするものであり、現在の一般物價水準の下落の原因は貨幣側に在ること、即ち一般物價水準は金又は貨幣金分量の函數であることを暗黙に肯定するものである<sup>18)</sup>。ノガロは、私の見る限りに於ては、斯くの如き見解

#### 金問題批判

に反對し、積極的には、「物價の平均的又は一般的變動なるものが必然的に起るのは、各種商品市場に起る變動そのものゝ結果であり、その變動は全然貨幣外の關係による<sup>19)</sup>」と述べると共に、消極的には「貨幣量に於ける變化が必然的に平等に各種商品上に影響するものである」といふ思想、即ち貨幣量に於ける變動が一般物價水準變動の窮極原因であるといふ思想を否定するものである<sup>20)</sup>と主張するものである。尤もかくの如き見解と雖も、已に述べた通り、物價の一般的變動は、單に各種商品市場に於て起り得る物價の變動から起ると主張するものであつて、それ自體、全然、貨幣的影響を排除せんとするものでない。かくの如き意味に於て、私は、所謂貨幣數量説に對する有力なる反對説として、ノガロの主張に、多くの示唆を見出し、尙ほ遂ぐべき深き省察が残されてゐることを信ぜんとするものである。

附言、ノガロの數量説に關する思想については、本論文の外尙ほ左の重要な論文がある。ついて参照せられんことを望む。

18) Cf Société des Nations; Interim Report of the Gold Delegation

19) Nogaro; op. cit. p. 34.

20) Nogaro; op. cit. p. 34.

- 1) Nogaro; Le rôle de la monnaie dans le commerce international et la théorie quantitative. thèse, Paris, 1904.  
邦譯に手塚壽郎：國際貿易に於ける貨幣の職分と貨幣數量説がある

- 2) — ; Contribution à une théorie réaliste de la monnaie (Revue d'économie politique, 1906)
-